

「場所としての図書館」に対する大学生の心理

立石亜紀子（慶應義塾大学大学院）

tateishi@slis.keio.ac.jp

1. 研究の目的

「場所としての図書館」(the library as place)は、「電子図書館」(electronic library)との対比を中心に、伝統的・本質的な図書館の役割とは何なのかを問い直す議論である。発表者は、大学図書館に関する「場所としての図書館」の本質的機能とは何なのかを明らかにしたいと考えている。

2009年6月に観察調査を実施し、「場所としての大学図書館」の実際の利用状況を調査・分析した。その結果、①学習場所としての役割、②PC利用者の存在、③多様な利用実態という、「場所としての大学図書館」の機能的特徴を明らかにした。その際、「図書館という場所が選ばれる理由」が観察調査からは判断できないことが課題となった。そこで2009年10月～11月にかけて、「場所としての図書館」の心理的側面を探るための質問紙調査を実施した。質問紙調査により、図書館を利用する学生のみならず、利用しない学生の心理（選択しない理由）についても明らかにすることで、「場所としての図書館」に対する大学生の心理と、利用行動との関連を分析した。

2. 調査方法

2-1 調査対象

調査対象は観察調査を実施した横浜国立大学の全学生 10,237人（2009年現在）とした。調査は2009年10月21日（水）か

ら11月13日（金）までの24日間、Web上に回答フォームをおいて、そこから回答してもらう形式で実施した。

2-2 調査項目

大学生の図書館に対する①図書館イメージ、②位置・建築・空間への意識、③図書館員への意識、④図書館利用目的などについて調査した。また、大学生の普段の学習行動（学習場所とその選択理由、学習時間帯等）についてもあわせて調査し、その結果と図書館利用がどのように関連しているかを分析した。

3. 調査結果

24日間の調査の結果、920件の回答があり、うち自由記述欄の内容から重複回答と考えられるものが10件あったため、有効回答数は910件、回収率は8.9%となった。回答者はやや大学院生の割合が高かったが、在籍数の割合に対して概ね一致していた。

3-1 学習行動

学習場所としては、①「自宅」（358人/39.3%）、②「図書館」（252人/27.7%）③「研究室」（223人/24.5%）④その他といった順番で回答が多く、大学においては図書館で、帰宅後は自宅だという学習場所の傾向が見えた（第1表）。学習場所の選択理由（複数選択可）としては①「集中できる」（611人/67.1%）、②「必要な資料・設備がそろっている」（399人/43.8%）、③「静か」

(359人/39.5%) という回答が多くなっていた(第2表)。

第1表
学習場所

勉強場所	回答数	比率
自宅	358	39.3%
図書館	252	27.7%
研究室	223	24.5%
喫茶店等	38	4.2%
学部自習室等	24	2.6%
その他	15	1.6%
合計	910	100.0%

(人)

第2表
学習場所選択理由

選択理由	回答数	比率
集中できる	611	67.1%
必要な資料・設備がそろっている	399	43.8%
静か	359	39.5%
席がいつも空いている	272	29.9%
飲食できる	258	28.4%
便利な場所にある	240	26.4%
きれい	119	13.1%
わからないことを聞くことができる	83	9.1%
おしゃべりができる	68	7.5%
その他	65	7.1%
合計	2,474	-

図書館が学習場所として選ばれるためにはこれらの要素が必要であることがわかるが、実際に「場所」と「その選択理由」のクロス集計をしてみると、主な学習場所を「図書館」としている回答者が理由として選択している比率が高いのは「集中できる」「静か」の2項目となった。「必要な資料・設備がそろっている」「便利な場所にある」「席がいつも空いている」などの理由は、学習場所の選択条件の中で上位になっていたが、それらの理由の中では「図書館」以外の場所の選択の比率のほうが高かった。「わからないことを聞くことができる」「飲食できる」「おしゃべりができる」といった選択肢では、図書館を選択している比率は極めて少なかった。

学習時間帯では①「17時～22時」(328人/36.0%)、②「22時以降」(282人/31.0%)という回答が多かった。17時以降を回答した比率の合計は67.0%に上っている。

3-2 図書館イメージ

図書館のイメージを表す言葉を18個列

挙し、当てはまると思うものを複数回答可で選択してもらった(第3表)。全体として図書館について、「静か」で「知的な雰囲気」というイメージを持っていた。学習場所の選択理由「集中できる」「静か」と一致した結果と言える。図書館利用頻度とクロス集計すると、図書館をよく利用している学生ほど、「親しみやすい」「気楽に入れる」「便利」「活気がある」「楽しい」「現代的で進んでいる」といったプラスのイメージを持っていたが、図書館をあまり利用しない学生は図書館に対して、「暗い」「近づきにくい」「時代遅れ」「つまらない」といったマイナスイメージを持っていた。

第3表 図書館イメージ

イメージ内容	回答数	比率
静か	619	68.0%
知的な雰囲気	407	44.7%
気楽に入れる	342	37.6%
便利	302	33.2%
親しみやすい	270	29.7%
明るい	170	18.7%
新しい	128	14.1%
不便	115	12.6%
暗い	95	10.4%
楽しい	87	9.6%
現代的で進んでいる	76	8.4%
古くさい	69	7.6%
つまらない	53	5.8%
騒がしい	48	5.3%
近づきにくい	47	5.2%
時代遅れ	33	3.6%
活気がある	32	3.5%
その他	46	5.1%
合計	2,939	-

(人)

3-3 位置・建築・空間

立地についての満足度を5段階で選択してもらい平均値を算出したところ、満足度は高かった(3.80)。また、図書館の中でどんなスペースが好きかを尋ねた(複数回答可)ところ、環境としてよく好まれていたのは「ひとりで勉強する場所」(496人

54.5%),「人が少ない場所」(491人/54.0%),「一人用の机」(349人/38.4%)などで,観察調査の結果と同様,静かに一人で,周囲を意識せずに学習できる環境が好まれていた。一方「みんなで勉強する場所」も80人(8.8%)と,ある程度の需要があることがわかった。この結果も観察調査の結果と一致していた。

同様に対面のひと気を意識しない環境の中では,「窓際」(400人/44.0%)の方が,「壁際」(148人/16.3%)と比べて3倍近い回答数があった。「明るさ」ということが近年の大学図書館にとっての一つのキーワードであることがわかる。一方,「開放的な場所」を好む人は201人(22.1%),「閉鎖的な場所」を好む人は173人(19.0%)で,それほど差がなかった。

3-4 図書館員

図書館の役割の変化に伴い,図書館員の役割の重要性が高まるという指摘がある¹⁾。本調査においては5段階の満足度調査により,大学生の図書館員に対する意識を調査し,点数化した。図書館員の一般的な接客対応への満足度は高かった(3.12)ものの,職員を課題解決の際に頼りにできる(2.38)とか,よく利用者のニーズを理解して業務を遂行している(2.04),という風には考えていなかった。回答は「わからない」の割合が高く,図書館職員の存在についてあまり考えたことがない利用者が多いこと,図書館職員に対する期待がそもそもあまりないことを示していると考えられる。

3-5 利用目的

14の利用目的を列挙し,「よくそのようないき方をする」「そのような使い方をすることもある」「そのような使い方はしない」の3段階から,最も当てはまると思うものをひとつ選択してもらい,それぞれを2点,1点,0点として平均値を算出した(第4表)。平均値が1を越えたものは「授業のための学習課題の本を読んだりレポートを書いたりする場所として閲覧席を利用する。」(1.38),「レポートを書いたり印刷したりするためにPCを利用する。」(1.20)「学習課題のために資料を探したり借りたりする。見つからない場合はカウンターで相談したり,新たに取り寄せたりする。」(1.05)で,1にやや届かなかったが,「授業やその他の勉強のために,図書館内でコピーをとる。」も0.95と比較的高かった。

第4表 利用目的平均値

主な利用目的	平均
授業のための学習課題の本を読んだりレポートを書いたりする場所として閲覧席を利用する。	2.4
レポートを書いたり印刷したりするためにPCを利用する。	2.2
学習課題のために資料を探したり借りたりする。見つからない場合はカウンターで相談したり,新たに取り寄せたりする。	2.1
授業やその他の勉強のために,図書館内でコピーをとる。	1.9
資格や趣味など,授業以外の勉強をするために閲覧席や資料を利用する。	1.8
面白い本がないかと書架をぶらつく。	1.7
新聞や軽い雑誌を見たり,ネットサーフィン・メール,ビデオを見たりする。	1.6
カフェで食事・休憩・友達と待ち合わせをしたりする。	1.6
授業とは特に関係のない自分の好きな本(図書館の資料に限らない)を読むために閲覧席を利用する。	1.6
空き時間に閲覧席で休憩や睡眠をとる。	1.6
友達と一緒に授業の予習や課題をするために閲覧席を利用	1.6
ゼミ学習・グループ発表・サークルのミーティングなどのためにワーキングスタジオやメディアブースを利用する。	1.4
空き時間に友達と会ったり,おしゃべりしたりする。	1.3
メディアホールや情報ラウンジで行っているイベントや講演会を見に来る。	1.3

平均値が上位の4つの回答のうち,1番目に多かったものと2番目に多かったものが共に,「長時間にわたる場所の利用」を示す使い方であった。この結果は,観察調査

の結果として示した①学習の場としての利用が多い、②図書館備え付けのPCの利用が多いという結果とも一致している。続いて、図書館機能の従来の利用である「貸出・複写」が挙げられている点や、グループ学習室の利用が少ない点なども同様である。これ以外の利用法については、ほとんどは0.5~0.7前後の数値となっていた。この点もまた、観察調査において非常に多様な利用法が観察された点と一致しており、「多機能」を前面に出すことで、「場所としての図書館」の利用を押し上げる効果につながっていることがわかる。

図書館を利用しない理由（複数回答可）については、上位2位が図書館の資料に関する不満、続いて時間的制約、さらに図書館の環境と立地に関する不適合と続き、電子ジャーナルやオンラインデータベースの利用を理由として挙げたのは全体の8.1%に過ぎなかった。

3-6 学部学生と大学院生との差異

学部学生と大学院生では図書館への意識や利用行動に違いがあるのではないかという仮説を立て、比較を行った。イメージ・立地と環境に関する満足度・職員に対する満足度に大きな差はなかったが、学習環境については、学部学生の方が図書館で勉強するという回答が多く（学部学生35.9%/大学院生9.0%）、利用頻度や滞在時間も長い。利用目的を比較してみても、図書館内の閲覧席やPCの長時間利用を示す利用法では、学部学生の平均値の方が高かった。学部学生の方が、「場所としての図書館」を

頻繁に利用している傾向が見られた。

4 結論とまとめ

大学生にとっての「場所としての図書館」について、観察調査による実態解明を背景として、学習行動と利用に関する意識を調査した。以上からわかったことをここでまとめる。①「場所としての図書館」の利用の中心は、学部学生である、②図書館のイメージは良い。よく利用する学生ほど、「親しみやすい」「気楽に入れる」等の好イメージを持っている、③図書館の「静か」で「知的」というイメージが、学習場所として選ばれる理由となっている、④空間的制約（立地）と時間的制約（開館時間）が図書館利用に影響している、⑤個人学習とグループ学習、開放的空間と閉鎖的空間など、時々々の目的に合わせて学習環境を選択できることが重要である、⑥図書館職員の役割の重要性は認識していない。

本調査の結果からは、「場所としての図書館」に対する大学生の意識が伺え、大学図書館が「場所の利用」を向上させるためのポイントが多く指摘できた。今後は、図書館員がこうした大学生の意識を、図書館建設やサービスに取り入れることに成功しているかどうかを知ることが課題となる。

注

- 1 竹内比呂也. デジタルコンテンツの彼方に図書館の姿を求めて. 情報の科学と技術. 2007, vol.57, no.9, p.418-422.